



今月の大槌びと

生徒会執行部のほか、復興研究会の活動も行っている皆さん。復興する大槌の「元氣」を高校から発信しようとして頑張っています。

- 菅野雅也さん(生徒会長)
- 佐々木加奈さん(副会長)
- 上山華歩さん(書記)
- 川崎颯太さん(副議長)

自分たちの町の事を知り町外の人たちへ発信する

復興研究会では、どんな気持ちで活動していますか？

菅野さん(以下菅)—僕は他校交流班で、他校や町外の方にプレゼンをすることがありますが、人と関わることがいい体験になりますし、震災を風化させないため、多くの人に発信する活動に意義を感じています。

佐々木さん(以下佐)—私は一年生の頃は研究会に入っていないませんでした。でも、住んでいても意外と町の事知らない(と気づいて、「誰が、どんなことをして、どのように町を良くしていこうか」と思っているか)知りたいと感じて、研究会に入りました。

川崎さん(以下川)—僕は震災の時、避難した人達の様子など、自分が見たことを伝えることで役に立てればと思っています。

活動を通して見つけた自分のやりたいこと

上山さん—私は子どもたちとふれあう活動が多く、子どもの喜ぶ姿を見るのが楽しいです。あとは、津波で家を流されて大変な思いをした人がたくさんいる中で、どうしたら自分が関わられるか考えるうちに、将来は建築士など家に関わる仕事がしたいと思うようになりました。

他の皆さんの将来やりたいことは何ですか？

川—僕は美容師です。元々人見知りで、人と話す機会を持ちたくて生徒会に入りました。コミュニケーションの上手な人に信頼される美容師を目指したいです。

佐—私は生徒会活動でも企画運営することが好きなので、進学後に役場に入って、大槌のために色々考えてやってみたいです。

菅—僕も役場に入って、地域に関わる仕事がしたいです。特に、人と関わることの大切さを学んだので、直接住民と話すことが多い部署で働いてみたいです。



防災フェスタでの研究発表

大槌びと クロストーク Cross talk

- 11月号 わか 若生 剛さん
- 12月号 大槌高校の皆さん

前号と今号の大槌びとが対談するコーナーです。様々な分野で活躍する大槌びとの皆さんが、誌面の上で出会います。「たし算」ではなく、「かけ算」の絆が、また新たな大槌を創っていきます。

大槌高校の皆さん(以下大)—中学生の頃職場体験で商工会さんに伺い、事業者訪問などした思い出があります。

若生さん(以下若)—そうですね。町内約350の事業者さんが会員で、補助手続きなどサポートする仕事です。

大—大槌にそんなにお店や会社があるのに驚きました。意外と自分の町の事でも知らないことがたくさんあります。

若—でも皆さんはすごいと思います。自分は高校生の頃、こんなに町の事を考えてなかったし、震災を経験した人がこれから減っていく中で、若い皆さんの活動は頼もしいです。

皆さんに教えたい事は、東京や埼玉などでの物産販売で、大槌の特産品はすごく人気です。ホタテなどは行列ができるほどです。

大—すごいですね！普段聞く機会がないので知らなかったけれど、そういう話を聞くと地元で自信が持てます。

若—皆さんも活動の中で知っていると思うけれど、震災を機に大槌を知ってくれた人もたくさんいます。その中から一人でも多く大槌のリピーターになつてくれたらと思います。

大—私たちが大槌の良いところをもっと紹介したいです。プレゼンの時間がもう少しあれば(笑)。

若—そうそう、僕もですけど楽しんでながらやりましょう。きつといい活動ができます。手伝えることがあれば力になるので、これからも頑張ってください。

大—ありがとうございます！

